KABURAGI REN

鏑木 蓮

座敷牢

講談社文庫

講談社文庫

常州大学図書館
藏書章

屈折光

鏑木 蓮

講談社

|著者| 鏑木 蓮　1961年、京都市生まれ。佛教大学文学部国文学科卒業。卒業論文は「江戸川乱歩論」。塾講師、教材出版社、広告代理店勤務などを経て、1992年、コピーライターとして独立する。2006年、『東京ダモイ』で第52回江戸川乱歩賞を受賞しデビュー。他の作品に『エクステンド』『救命拒否』『思い出探偵』『白砂』『見えない鎖』『思い出をなくした男』がある。

屈折光（くっせつこう）
鏑木 蓮（かぶらぎ れん）
© Ren Kaburagi 2011

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2011年9月15日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277055-2

目次

第一章　絶命　7
第二章　身命　98
第三章　活命　192
第四章　余命　293
第五章　存命　358
第六章　延命　396
第七章　使命　469
解　説　佳多山大地　498

講談社文庫

屈折光

鏑木 蓮

講談社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

第一章　絶命　7
第二章　身命　98
第三章　活命　192
第四章　余命　293
第五章　存命　358
第六章　延命　396
第七章　使命　469
解　説　佳多山大地　498

屈折光

第一章　絶命

1

内海綾子（うつみりょうこ）は、八幡平（はちまんたい）の麓（ふもと）の町から盛岡市内へ向かって愛車のバイク、イーハトーブに乗って走っていた。

イーハトーブは、二十六年前に半トライアル用としてホンダが出した125ccのバイクだ。

市内よりも高低差のある郊外を走ることの多い綾子は、スピードより力強さを重視して、三年前に中古で手に入れた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もっとも宮沢賢治が好きな綾子には、「イーハトーブ」というネーミングだけで購入理由となった。

イーハトーブとはエスペラント語を基に岩手県を表した言葉で、賢治が理想郷という意味を与えた。

チェーンが発する断続的な金属音が、スリムな車体から綾子に伝播する。その振動が心地いい。地面の凹凸を忠実に拾う、堅めのサスペンションもいまでは好みとなった。

T牧場で、ホルスタイン牛を健康診断した帰りだった。

軟便気味で、サルモネラ症を心配したが、家畜保健所の検査でも菌は検出されず、三日間様子をみてきた牛だ。今日の診断では完全に元気を取り戻し、食欲も旺盛で問題はなかった。

その結果を受けて気分が軽くなり、いつもよりバイクの振動が軽快に感じる。

もし検査結果が芳しくなかったら、さらなる医療機材を積める四輪車に乗り換えなければならないところだった。

右手に岩手山の雄姿を見ながら津軽街道を南へ向かう。そのまましばらくは陸上自衛隊演習場の広大な敷地が続いた。

徐々に車の数も増え、さらにシフトダウンして減速した頃、ジージャンの胸にエンジンとは違う振動を感じた。

綾子は前方のコンビニエンスストアの駐車場にバイクを止め、胸ポケットから携帯電話を取り出す。

ディスプレイを見れば、古い民家を一緒にシェアしている森田望実の番号が表示されていた。

やっと連絡してきたんだ。

「何度かけても出ないし、いい加減にしなさいよ」

あれこれ言い訳をきかされる前に、がつんと言ってやらないといけない。

「もしもし？」

あれ？　知らない声だった。

「どなたでしょうか」

綾子は改まった声で尋ねた。

「私、盛岡東署の加藤といいます。森田望実さんの所持品であった携帯電話に何度もかけておられますね。森田さんとどういうご関係ですか」

持って回った言い方と、男が森田の携帯電話を手にしていることに嫌な予感を覚え

た。
「森田が、どうかしたのですか」
毅然とした声を出した。
「森田さんのご家族に、至急連絡をとりたいのですが」
加藤は事務的な言い方だ。
相手が質問に答えないのはおかしい。森田の携帯電話を使った振り込め詐欺かもしれない。
「何があったのか、教えてくださいません？」
少し強めに言った。
「関係者でないと申し上げられません」
加藤に動じる気配はない。
何が目的なんだろう。ひょっとして本当に警察なのだろうか。
「私は森田の、友人です」
綾子は、同居人という言葉を飲み込んだ。
「ご友人？」
「いったい、森田がどうしたと言うんですか」

語気を荒らげてしまった。
「名刺の住所は東京の渋谷となっていますが、間違いないですか」
加藤は森田の名刺も持っている。
「それは、仕事で借りている事務所の住所です」
「森田さんのお身内の連絡先、分かりますか」
「いま移動中なので。何なら私が東署に行きましょうか」
「ほう。あなたはいまどちらに」
「津軽街道、砂込川付近です」
綾子はわざとローカルな地名を使い、加藤に土地勘があるのかどうかを探った。
「盛岡におられるんですか、そうですか。では、ご友人のあなたにご足労願いましょうか。携帯の表示では綾子さんとなっていますが、お名前は？」
加藤の落ち着き払った声は、やはり警察官のものらしい。
「それはお伺いしてからでも、よろしいですか」
まだ名乗りたくなかった。
「そうですね、そうしましょう」
「東署の加藤さんですね。いまからそちらに」

綾子は電話を切って、キックペダルを踏んだ。暖まっていてもエンジンが一回ではかからないところも、このマシンの個性だ。

2

盛岡東署の受付で電話の件を話すと、すぐに二階の応接室に案内された。

「電話では失礼しました。加藤です」

椅子に座らず待っていると、ややあって姿を見せたずんぐりした男が、名刺を差し出した。そこには巡査部長、加藤泰吉（やすきち）とあった。

「こちらこそすみません。私、振り込め詐欺かもしれないと」

「確かめにこられたんですか。賢明です」

そう言ってにこりともしない加藤に座るように促され、綾子も椅子に腰掛けた。

「それで、森田が、何かしでかしたんですか？」

森田が何かトラブルに巻き込まれたのだろう。もしくは強引なところのある彼が、誰かに訴えられるようなことをやらかしたのかもしれない。

「その前に、あなたのお名前とご職業をお教えください」

綾子はジージャンのポケットから、勤め先である『ゆうゆう動物病院』の名刺を取り出した。

「ほう、盛岡インターチェンジの近くですね。主任獣医師さんですか。ご自宅の方は、どこですか」

「動物病院からバイクで五、六分の場所です」

綾子は自宅の住所を加藤に言った。

加藤はメモを取ると顔を上げて、居住まいを正したように見えた。

「内海さん、大変申し上げにくいことなのですが。森田さんは、今朝早く遺体で発見されました」

「遺体！　そんな……」

「免許証の本籍にはすでに別の方が住んでおり、それで森田さんの鞄にあった携帯電話を使わせていただきました。着信履歴から最近頻繁にアクセスされているあなたへ連絡させてもらったという訳です」

驚いたが、実感が湧かない。

綾子と森田は結婚している訳ではなく、同居人としか言いようがない。創薬コーディネーターという職業柄、森田は全国、いや海外出張にもよく出かけていて、月に一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com